

新学習指導要領の下での授業実践

— 伝統的な言語文化の学習における小・中・高の連関について(1) —

新治 功 吉田 裕久 山元 隆春 三藤 恭弘
羽島 彩加 朝倉 孝之 岡本 恵子 西原 利典
増田 知子 松本小百合 三根 直美

1. 研究の背景と課題

平成18年12月、教育基本法が改正された。その第二条（教育の目標）の五に、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」ことが掲げられた。これに伴って、平成20年1月、中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』（以下、「答申」）は、「教育内容に関する主な改善事項」の第三に、

伝統や文化に関する教育の充実である。（中略）グローバル化の中で、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々との共存のため、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重要になっている。（p.52）

として、自己理解、他者理解双方の観点から、「伝統や文化に関する教育の充実」の重要性について指摘している。

そして、国語科で取り組む伝統文化＝言語文化＝主として古典について、次のように述べている。

まず国語は、長い歴史の中で形成されてきた我が国の文化の基盤を成すものであり、また、文化そのものである。国語の一つ一つの言葉には、我々の先人の情感や感動が集積されており、伝統的な文化を理解・継承し、新しい文化を創造・発展させるためには、国語は欠くことのできないものである。

このような観点から、（中略）国語科では、小学校の低・中学年から、古典などの暗唱により言葉の美しさやリズムを体感させた上で、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧、漢詩・漢文などの古典や物語、詩、伝記、民話などの近代以降の作品に触れ、理解を深めることが重要である。（p.57）
こうして古典は、小学校の低学年から系統的に国語科の教育内容として位置付けられることになったのである。

そして、古典指導の目標が、次のように示された。

古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。（p.75）

これまででも小学校の高学年に文語調の教材文はあったが、実質的な古典学習は中学校がその開始時期であった。ここに小・中・高校を通じた古典指導の系統性という課題が新たに生じることになったのである。その学校段階ごとの内容について、「答申」は次のように示している。

（小学校）言語文化としての古典に親しむ態度を育成する指導については、易しい古文や漢詩・漢文について音読や暗唱を重視する（下線は引用者、以下同じ）。

（中学校）古典の指導については、言語の歴史や、作品の時代的・文化的背景とも関連付けながら、古典に一層親しむ態度を育成することを重視する。

（高等学校）「国語総合」では、（中略）我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむ（中略）「古典A」は、古典の原文（近代以降の文語調の文章を含む）のみならず、古典についての解説文や小説、随筆なども教材として幅広く取り上げ、古典の世界に親しむ態度をはぐくむ。（中略）「古典B」は、（中略）古典の原文や、古典についての評論文などを教材として取り上げ、（中略）系統的に古典に接することができるようにし、古典に対する関心と知識を高め、古典を読む能力を育成する。（pp.76～78）

こうして言語文化としての古典の学習について、小学校から高等学校に至るカリキュラムが系統的に示された。

私どもは、幸いなことに、同じキャンパスの中に、小学校・中学校、そして高等学校を持っている。これらを見通すことができる点において極めてユニークであ

る。この特色を生かして、小・中・高校を見通した古典の授業のあり方を求めて取り組むことにする。(吉田裕久)

2. 研究の目的・方法

研究の目的

新学習指導要領では、「伝統的な言語文化」の学習が強調されており、従来規定されていなかった小学校からの学習が導入され、すでに実施されている。今まで中学校で古典に出会うというスタートラインが、小学校にシフトしている現状をふまえた、小学校から高校までを見通した、新たな視点をもった指導が必要となる。小・中・高の現場では、授業実践においてどのように対応していくべきなのか、その方向性を探る。

小・中・高の連関はどのように考えていけばよいのか。

- (1) 新学習指導要領から
- (2) 児童・生徒の意識調査(アンケート)から
- (3) 教科書教材から

以上三つの視点から、児童・生徒の実態や意識をふまえた、小・中・高の学習の連関を考えた実践の方向性を考察する。ただし、本研究は古文に限定している。

研究の方法

- ①新学習指導要領の内容の比較・検討
- ②各学年2クラスずつの、伝統的な文化に対する意識調査(アンケート)の実施
- ③小・中・高の教科書教材の一覧作成と検討

3 新学習指導要領について

小学校の新学習指導要領では、低学年で、「昔話や神話・伝承などの本や文章」を、中学年で「易しい文語調の短歌や俳句」、「ことわざや慣用句や故事成語など」を、高学年では「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章」の音読や「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知る」ことが挙げられている。古典の種類が規定がなされており、音読、暗唱などにより、古典の世界を知る導入の扱いであると判断される。実際に平成23年度版教科書も、そのような教科書編成となっている。

中学校では、中1で「文語のきまりや訓読の仕方を知り」「古典の世界に触れる」「さまざまな種類の作品があることを知る」ことから、中2では「古典の世界を楽しむ」「古典に表れたものの見方や考え方に触れること、中3では、「歴史的背景などに注意して」読み、古典の「世界に親しむ」「古典に関する簡単な文章を書く」という段階が上げられている。「触れる」→「楽しむ」→「親しむ」をどう段階づけていくかがポイントとなろう。小学校段階では、古典の存在を知り、中学校では、古典の世界に触れて、その面白さを知って

楽しみ、より古典の世界の根底に触れることが必要であると判断される。さらに注目する点は、「書くこと」が中3から取り上げられていることである。従来「読むこと」中心であった古典について、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の指導も組み入れることが示唆されている。具体的には、スピーチやディベートと関連させたり、古典と関連させて随筆や小説を書くなどの創作活動も考えられる。

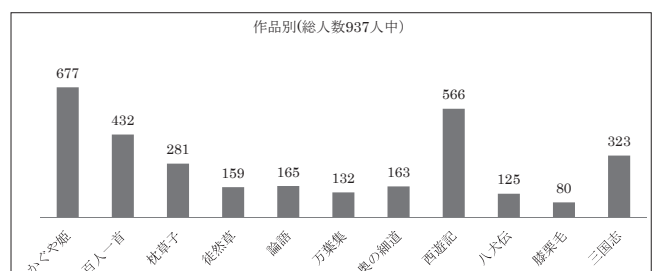
さらに高校では、「文語のきまり、訓読のきまりを理解すること」「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気づき」、より高度な古典との関わりを求めている。古典は実は我々の思想の中に入り込んでおり、そのことにはほとんどの者が気づいていない。遠い別世界のことという印象から逃れられないのは、高校1年の国語総合において全訳をし、古典文法を覚え込まされるなど、興味・関心がわくよりも、減退してしまう状態の打破を考えているのであろう。全く私たちとは別物であるというのではなく、私たちの先祖が創り上げた作品で、言語やものの見方・考え方、感情などさまざまな面から今と共通のものがあることをいろいろと知っていくことが望まれているのであろう。そういう学習を積み上げていくことにより、古典の意義を感じる事ができるであろう。(三根直美)

4 児童・生徒の意識調査(アンケート)について

広島大学附属小学校の各学年2クラスに合わせ、中・高も各学年2クラスで実施し、総数937人となった。また、小学校1, 2, 3年生については同じアンケート形式では難しかったため、教員による口頭説明と挙手で実施した。それ以外は、同じアンケート用紙による実施である。以下にその分析を挙げる。

「学校で習う前に、古典(昔のお話)を読んだり、見たりしたことがありますか。」の質問に対して「ある」と答えた割合は全体の90%であった。「ない」と答えた10%は中高生に表れており、質問の「古典」を教科書教材に限定してとらえたのではないかと思われる。

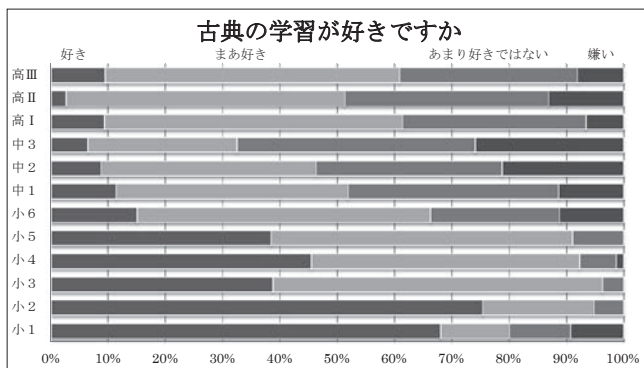
学校で習う前に読んだり見たりしたのはどの作品か、調査者側で11作品を挙げ、該当するものすべてに○をつけさせた。その集計が(図1)である。



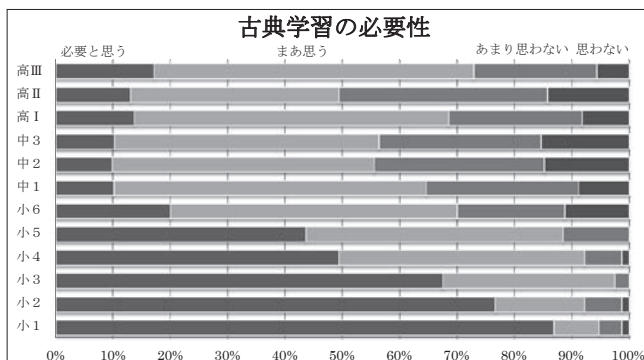
(図1)

「かぐや姫（竹取物語）」は「浦島太郎」「桃太郎」など他の昔話と同様、親が絵本などで読み聞かせることで出会ったのではないと思われる。『西遊記』『三国志』はテレビ、漫画、ゲームなどメディアに因るところが大きい。男女別にみると、「かぐや姫」「百人一首」「枕草子」「論語」において女子が約60%を占めていて、その他は男女半々である。が、『三国志』だけは逆に男子が60%を占めており、作品により性差が表れている。

次に「古典の学習が好きか嫌いか」（図2）、「古典学習の必要性を感じるか」（図3）について、学年別に比較・分析を行った。



(図2) 古典(昔のお話)を学習することが好きですか。

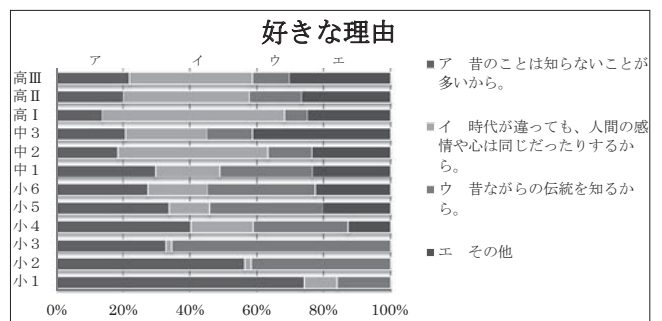


(図3) 古典(昔のお話)を学習することは必要なことだと思いますか。

概括すれば、小学校低学年から中学高学年に上がるにつれて「古典学習」が嫌いになる傾向がある。そのまま高校に上がってさらに「嫌い」の割合が増えるかと思われたが、逆に「好き・まあ好き」の割合が50%を超えている。「必要性を感じるかどうか」と重ねるとさらに興味深い結果となった。小学生は「好き・まあ好き」と「必要と思う（まあ思う）」が重なるが、中学生になると「必要と思うが好きではない」という傾向がみられ、高校生になると中学生に比べ「好き」の割合も増えるが、それ以上に「必要と思う」割合が大きく伸びている。

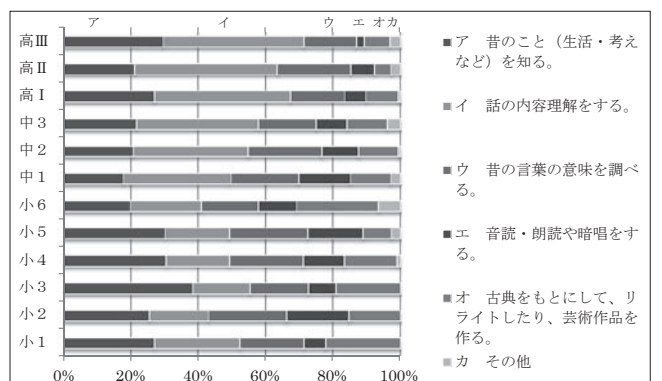
これは質問文が「学習」ということばを使っていることに因るところが大きい。小学生は「古典（昔話）」と学習の場以外で触れることが多いため、「学習する」

という意識があまり強くないのではないだろうか。一方中学になると、小学校に比べ「国語科授業」の中に「古典作品」の形で学習が含まれ、定期テストにも出題されるため文字通り「強いる、勉める→（やらされている）」という感覚を持つようになる。高校でも「古典」授業の中で扱われる点では中学校と同じであるが、高校では科目として独立し、（注：本校では高校一年生の「国語総合」を「現代文編」と「古典編」に分割して授業を行い、「古典編」により多くの時間を費やしている）学習時間が増えることで、古典の世界により深く触れることができ、面白さを味わうことができるために「好き」の割合が増え、一方では進級・受験のためという意味で「必要性」を中学生よりも強く感じているのではないかと考えられる。



(図4)

「古典学習が好きな理由」を細かく質問してみると、低学年では「昔のことを知ることができるから」という知識欲に因るが、学年が上がるにしたがって「時代が違って人間の内面に目を向けるようになる。」という人間の成長・発達段階によって「古典学習」の内容を考える上で参考にしたい。「嫌いな理由」は学年を問わず「ことば(古語)・文法のわかりにくさ」が大半を占めた。



(図5)

「古典学習でどんなことをしてみたいか」を質問した結果が(図5)である。選択肢ア・イ・ウは「知識・理解」

エ・オは「言語活動」である。学年による相違は顕著ではないが、学年が上がるにつれて「言語活動」より「知識・理解学習」を求める傾向にあるように思われる。

これに関連して、「今まで学習した古典の中で、一番興味深かったり、印象に残っている授業は、何の授業か。またその理由」を小学4年生以上に自由記述で答えさせた。各学年でそれぞれ多くを占めたものと、その理由を抜粋する。(下線稿者)

小学4年～6年

「俳句」(理由) リズムがおもしろい、自分で作ることができる、など。

「平家物語(那須与一)」(理由) 音読・暗唱がおもしろかった、みんなで声をそろえるのが楽しいから、など。

「百人一首」(理由) リズムがいい、覚えて遊ぶのが楽しい、など。

「狂言(柿山伏)」(理由) 狂言ははじめて体験したから、映像(ユーチューブ)を見たり、やってみたりしたため、話し方が面白い、など。

中学1年～3年

「竹取物語」(理由) 初めて本格的に古典を勉強したから、暗唱や意味調べをしたから、かぐや姫のもととなる話を知ったから、など。

「故事成語(矛盾・五十歩百歩)」(理由) よく使う言葉でその語源を知ることができた、孟子の考えに納得できた、など。

「平家物語」(理由) 戦いの中の表現や心情が細かく記してあって面白い、覚えるのに苦労した、昔の武士の気持ちなどが分かったり、その当時の様子などがよく分かるから、学習していくうちに意味が分かったから、内容がわかりやすかったから、直実の心の動きが良かった、など。

「竹取物語」(理由) 小さいころから知っていて興味を持てた、かぐや姫の話が意外と奥深いものだったから、かぐや姫との違いに興味を持てた、など。

高校1年～3年

「伊勢物語(筒井筒)」(理由) 歌物語というものをはじめて知ったから、人物の心情の変化がおもしろかった、一途な恋の女の人に共感するから、やはり年ごろにはこういう話がおもしろい、など。

「源氏物語」(理由) 趣深い作品だから、有名だから、自分で読んだだけではよくわからないところの意味がわかったから、など。

「三国志(赤壁の戦い)」(理由) 三国志が好きだから、映画で観たから、武将たちの知や度量の試し合いが物語的に描かれていておもしろく迫力があつた、など。

「史記(項羽と劉邦)」(理由) 人物の性格、内面をうかがわせるような記述を読み説くのがおもしろかった、戦国時代の頭脳と体力を駆使した戦いが昔の形式で書かれているのを読むことはとても面白い、など。

ここでも、小学校では「言語活動」の印象が強く、中学校では「理解学習」に意味を見出し、そして高校では古典世界に生きる人間や書き手に興味を持っていることが伺える。

これまで挙げてきたアンケート結果とその分析から見えてきたことは、子どもたちのほとんどが就学前に何らかの形で「伝統的な言語文化」と出会い、それがまず「音声」からであるということ。それらは子どもたちにとって「親しみ」があり「面白い」と受け止められているが、学年が上がり「学習」と意識しはじめると興味が薄れてしまう。そう考えると「新学習指導要領」で「伝統的な言語文化に関する事項」を明確に打ち出し、小学校段階でも「学習」の性格を色濃くすることは逆効果になるおそれがある。

しかし一方で高校生になるとまた違った意味で「古典」に面白さを感じ始める。それは青年期に入り自分自身を含む「人間」の内面に目を向けるようになったとき、「古典世界に生きる人間」にも同様の興味を示すからに他ならない。「古典学習」はその部分を支えるものでなくてはならない。

とすると「古典学習」の成立が最も難しいのは、中学校段階ということになる。小学校と高校を繋ぐものとして中学校の学習をどう位置付けるかが課題となるであろう。(西原利典)

5 教科書教材について

小学校1年から6年、中学校1年から3年、高校1年の国語総合と10年間を通して、教科書教材の一覧を作成した。(表1) 小学校、中学校は発行されている教科書はすべてあげているが、国語総合については、小学校、中学校の教科書を作成している会社(三省堂、教育出版、東京書籍の三社)のみあたっている。国語総合で取り上げられる教材は小・中とは全く違っているため、一覧表の教材は小・中との関連においてのみ取り上げている。分析の結果、次のようなことが分かった。

①教材の重なり

『枕草子』の「春はあけぼの」と『徒然草』の「つれづれなるままに」、『平家物語』の冒頭部分は、小5～高校1年まで取り上げられており、小・中・高と3回も目にする事となる。扱い方は、それぞれ異なっており、小学校では音読を中心にして、そのリズムを感じたり、書くことを取り入れているものもある。ただし、中学校で従来やってきたことを小学校で取り入れている場合もある。特に「春はあけぼの」は、小学校で中学校と同じような実践(自分たちの感じている、季節で代表的なものを取り上げよう)をしていたので、中学校では別の教材をとりあげていく傾向にあるよう

だ。高校では、「春はあけぼの」は参考程度にのっているだけで、実際に授業をする必要はないだろう。ただし、「香炉峰の雪」などは、漢詩と合わせて学習すると効果的だし、さらに敬語などが使われていて、主語がなく、古文そのままで読解しようと思うと難しい教材であるので、高校で学習するべきだと考える。『徒然草』の冒頭は、それだけ読んでわかりにくいので、小学校、中学校とも声に出してリズムを味わう扱いしかできないと思われる。「高名の木登り」や「猫また」などは内容的にわかりやすいので、中学2年生ごろに最適の教材であろう。実際に高校一年生でも「高名の木登り」は入っているが、今後中学校教材として定着

させていった方がよいと考えられる。

また、『平家物語』の冒頭部分の内容の扱いは難しいが、声に出して読んで、リズムや流れの美しさ、言葉の響きなどは中学校で学習しておくことが望ましいであろう。

『奥の細道』は中・高ともに載っているが、内容的にわかりやすいので、中学校で扱って国語総合では取り上げなくてもよい教材である。中学校の教科書会社によっては、「旅立ち」「平泉」だけのものが多いので、「立石寺」なども組み入れて、内容的にもう少し充実させる必要があるであろう。今後、中学校での学習教材として定着させていくべきである。

(表1) 小～中～高校1年 教科書教材一覧

作品名	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1
昔話	学・教・光・東									
神話	三	学・光・教・東								
百人一首			光・	学・光・東・三	学		三・教(資)			
枕草子	春はあけぼの				学・光・東	教・三	三(資)	教・光・東	学	
	うつしきもの					三		三・教	学	
	五月ばかり							三		
	香炉峰の雪								学	三・明
徒然草	冒頭(序段)				東	教・三	三	東		
	仁和寺にある法師(52)							三・東・教・光		東新
	猫また(89)							学		東・東精・東新
	ある人、可射ること(92)							三・教		
	高名の木登り(109)				光			学		東精・東新・三・三新
八つになりし年(243)					三					
平家物語	冒頭				光・東		三	東・教・学・光		
	教盃の最期 那須の与一							三・教・学 東・教(資)・光		
俳句			東・教・学・三・光				三・東			
竹取物語			三		光・東		東・教・学・三・光			東・三・明・教・教新
落語		学		光・三			三(資)・教・光(資)			
川柳							三(資)			
狂言	しびり					三			教	
	柿山伏					光				
	説明							三(資)・光(資)		
古典の冒頭							三(資)	教・光(資)		
奥の細道	冒頭 月日は					教・三			東・教・学・三・光	東・東精・教・教新・三・三新
	平泉								東・教・学・三・光	
	立石寺								教	
伊弉保物語	犬と肉のこと						東			教新
	鳩と蟻						東			三新
古事記							東(資)			
土佐日記							東			東・東精・教・三新・三
伊勢物語							東			
古典の文法							学(資)	学(資)	東(資)・学(資)	
古語	今に伝わる注したい古語							学(資)	学(資)	
	古典の言葉								東(資)	
能					三			東(資)・光(資)	三(資)	
万葉・古今・新古今									東・教・学・三・光	東・東精・東新・三・明・教・教新・三・三新
東海道中膝栗毛							教			
歌舞伎								教	光(資)	
古典の中の擬声語・擬態語								教		
宇治拾遺物語	小野篁				学					
	虎のそら寝									東精・東新・教・教新
	とらわれた心に突き立つ矢						学			
逸野物語								学		
ことわざ・慣用句			教	学・光						
御伽草子		浦島太郎		三						
文語詩					東・教	学				
古文に関する説明文・解説文							光・教(資)・学(資)	東・教(資)	東(資)・三(資)	

略字—学(学校図書)教(教育出版)三(三省堂)東(東京書籍)光(光村図書) 東新(東京書籍・新編国語総合)東精(東京書籍・精選国語総合)三新(三省堂・新編国語総合)三明(三省堂・明解国語総合)教新(教育出版・新国語総合)

②新しい試み

古典の冒頭と題して、三省堂と教育出版で、中2、3で参考資料として15作品程度の冒頭を挙げているのが新しい試みである。古典独特のリズムに触れることで、高校での学習がよりスムーズになるのではないかと。また、古典の文法について、東京書籍では中3、

学校図書で中1～中3で資料として紹介されている。国文法を習った上で、古典文法を軽く確認していくことは、高校への橋渡しとして重要だと感じる。

さらに教育出版の中2では、「古典の中で使われる擬声語・擬態語」という山口仲美の説明文を載せていて、古文そのものではなくて、違った面から古文への関心を

持てるアプローチが考えられているのも、面白い。

古典についての説明文・解説文を組み合わせ、発展的な学習を考えているものも多い。単元学習のようなアプローチが効果的だと考えられていることだろう。

③新教材

落語が小2からとりあげられていたり、能や狂言、歌舞伎が小5から入ってきている。中学校においても、狂言「しびり」や、歌舞伎「外郎売り」といった新教材やカラー資料でその様子が紹介されていたりと、日頃目にするものがない現在も残る古典芸能に触れる機会が組み入れられている。学校鑑賞会などの機会があればよりよいのであろう。

また、『東海道中膝栗毛』（中1）や『御伽草子』『浦島太郎』（小4）、『遠野物語』（中3）なども今までみたことがない作品である。『東海道中膝栗毛』、『遠野物語』は江戸時代や近代以降の作品であり、「浦島太郎」は、現在昔話として知っているものの原本に当たるという『竹取物語』と同じアプローチ方法である。実は附属中学校の3年生は、数年前から三学期に国語の総合学習として、『御伽草子』『浦島太郎』の学習をしている。10時間程度の実践で、本文の全文訳をして、グループで調べるテーマを決め、発表資料を作成するという流れである。

固定化した教材だけではなく、魅力的な新教材をどんどん開発していく必要性があろう。

高校の国語総合の教材は、改訂に際しては従来の定番のもので動きはあまりないだろうと考えられる。中学校で扱うものと高校で扱うものの区別をはっきりして、重なりがないようにする必要がある。（三根直美）

6 反省と課題

アンケート結果が教えていることの一つは、小学校段階での古典に向かう意欲は極めて強く、学年が上がるにつれて、その意欲が失われていくということである。これは授業の問題ではない。むしろ、古典に触れる機会が増すにつれて、興味が少しずつ薄れていった結果であるとも考えられるし、各々の関心の所在が多様化していったためであるとも考えることができる。取り組もうとする対象に新しさ・珍しさを感じられなくなった時、学習者の学習意欲が減退するのは無理もない。

「嫌いな理由」として多くの学習者が「ことばや文法的なことなど、わからないことが多いから」を挙げているが、これはいわゆる古典を敬遠する理由として従来から取り上げられてきたものである。裏返せば、言語抵抗を取り除いていく工夫をするだけでも、この「嫌いな理由」を解消することができるはずだということになる。

注目したいのは、「教科書以外に読んでみたいか」という問いかけに対して、いずれの学年でも、「思う」

という回答が「思わない」という回答を上回っているということである。これは、教科書以外の古典への興味関心は少なくともどの学年でも保たれているということでもある。つまり、未知の文章を読みたいという願望を児童生徒が持っているということであらわすデータであり、その願いに応じることでの教材化となり、授業づくりなりを私たちは行っていかなくてはならないということである。

「古典」を読むことができるということは、人びとが語り伝えてきた「知恵」を手にするにもなる。その「知恵」をもとにして、生きていくためのさまざまな方法や人生を見つめていくための見通しを手にすることができるはずである。そのような見通しを学習者が得るために何が必要なのかということ、追究していかなくてはならない。

イタリアの作家、イタロ・カルヴィーノは、『なぜ古典を読むのか』（須賀敦子訳、みすず書房、1997年）という本のなかで、「古典」を多様に定義づけた。彼が言う「古典」概念は国語科のそれよりも広いものだが、次のような定義づけは国語教材としての古典作品に照らして吟味したくなるものである。

4 古典とは、最初に読んだときとおなじく、読み返すごとにそれを読むことが発見である書物である。

5 古典とは、初めて読むときも、ほんとうは読み返しているのだ。

6 古典とはいつまでも意味の伝達を止めることがない本である。

7 古典とは、私たちが読むまえにこれを読んだ人たちの足跡をとどめて私たちのもとにとどく本であり、背後にはこれらの本が通り抜けてきたある文化、あるいは複数の文化に（簡単にいえば、言葉づかいとか慣習のなかに）足跡をとどめている書物だ。

9 古典とは、人から聞いたりそれについて読んだりして、知りつくしているつもりになっても、いざ自分で読んでみると、あたらしい、予期しなかった、それまでだれにも読まれたことのない作品に思える本である。

カルヴィーノがこうした定義のなかに示しているように、「古典」とは動かざる実体なのではなくて、絶えず読む側が発見し、その発見を更新しつづけていくものである。このような見方を、教室や教科書の中の古典作品にとってみることは、教材開発においても授業づくりにおいても重要な課題である。（山元隆春）

引用（参考）文献

- 1) 「古文・漢文を中心とした学習指導事例集」花田修一監修・編著 明治図書 2011. 11
- 2) 「新しい教材と視点で創る古典の授業」田中洋一編著、東洋館出版社 2010. 4